

「水戸の先達」より

水戸市教育委員会

室田義文翁のご紹介

昭和八年に幕末殉難志士の忠魂塔「回天神社」とともに、「流芳萬古」碑（篆額田中光顕、撰文徳富蘇峰）を、昭和十年に諸生派のために祇園寺境内に「恩光無辺」碑（篆額室田義文、撰文朝比奈知泉）を、昭和十二年に桂村の黒沢止幾の旧宅に「忠烈無雙」碑（篆額徳川圀順、撰文室田義文、書坂本左狂）をそれぞれ建てることに中心的な役割を果たしたのは室田義文であった。

義文は弘化四年（一八四七）九月十九日室田平八の子として、江戸小石川水戸藩屋敷内で誕生した。母は森かねといった。幼名は一太郎、はじめ長男のあつかいであったが、八歳上の兄平三郎がいた。後にみずから申し出て次男のあつかいとなる。

一太郎は生来虚弱であったが七歳のとき水戸に移り、弘道館に学ぶ頃から腕白ぶりを発揮するようになる。武芸は面白いが素読はつまらない。「四書」、「五経」を順番に読み、解釈させられる。そこで読めない所があると、師匠の教本をこっそり飯粒で貼ってしまう。それとは知らず師匠はとばしながら講義するから、難しいところとはばし、予定

のところへ早く到達する。こんないたずらもした。

天狗・諸生両派の争乱の中で明治維新を迎える。長谷川清の一隊に加わり、諸生派追討のため東北に向かう途中で、市川勢が会津から水戸に戻り、水戸城を攻撃しているとの知らせを受け、急遽水戸に戻る。弘道館は市川勢に占拠された。奪回をはかり奇襲をかけて弘道館に突入した一太郎は、右胸部から右肩にかけて鉄砲玉により貫通、左手の肘はザクロのような傷で関節ははずれていた。

水戸藩では佐倉の佐藤尚中を招いて負傷者を治療させた。一太郎についてはあまりの重傷で、このままがよいとの判断であったが、気丈な一太郎の発言に驚き治療を加えた。一命はとりとめたが、後に落馬により関節がはずれ、傷口が化膿してきた。再び佐藤尚中の治療を受ける。傷口の化膿は肩の骨がのこぎり状になっているため、これをヤスリでこしこし擦った。「この時の痛さは筆舌につくせぬもので、思い出すと今でもぞっとする」と晩年まで語っている。

廃藩置県の後大政官に出仕し、丸山作楽に従ってカラフトに出張、外国関係に興味を持つ。東京に戻り洋語学校

に入学、伊藤博文の知遇を得て外務省のアルバイトをしながら洋語学校を卒業し、明治五年正式に外務省勤務となる。

明治十一年サンフランシスコ領事館勤務となり、名も義文と改めた。外務卿井上馨の秘書、天津領事、釜山領事を歴任した。明治三十一年メキシコ公使となる。メキシコから一時帰国すると、福州事件が起こっていた。これは台湾総督児玉源太郎らが陸戦隊を派遣して、アモイの本願寺別院を焼打ちし、これを口実に出兵する計画であった。この焼打ちを英国公使館員に目撃され、国際問題に発展する瀬戸ぎわであった。義文は山県総理に懇願されアモイ総督にかけ合い、事件の拡大を未然に防いだのである。

帰国すると加藤外務大臣が事件の処置に不満で加藤と対立し義文は外務省を辞任した。いっぽう伊藤博文からは長州の第百十銀行の立て直しを依頼され、再建に手腕を発揮した。その後益田孝に誘われ北海道の炭鉱汽船の取締役となり、実業界で活躍することになる。

明治四十二年伊藤博文は、ロシアと大陸問題について協議する目的でハルピンに赴いた。室田義文も随行員の一人として従っていた。ロシアの代表は

コーフツォフの一行であった。一行はハルピン駅に伊藤らを出迎えに来ていた。その駅頭で伊藤は凶弾に倒れる。犯人は安重根だといわれているが、彼は伊藤の顔を見知らず、室田を伊藤と間違えていたともいう。息絶えるまで伊藤のそばにいて、最後のブランドーを含めたのは室田義文であった。

義文を最もよく理解していた伊藤博文に先立たれると、彼は実業界で仕事をしていった伊藤に報いようと決意し、各方面で活躍した。日本人造肥料、三共製薬、内国貯金、日本不動産、常磐貯蓄銀行、朝日海陸運輸などの頭取、社長、重役を勤めた。

明治三十四年貴族院議員に勅任され、従四位勲二等の栄誉職のほか、財団法人常陽明治記念館の副会長、水戸育英会長、水戸徳川家顧問なども勤めた。

晩年母親の養育の恩に感謝して、森氏の森を分け「三樹」と号した。義文は特命全権大使として外国に赴く際、記念に櫻樹六百本を常磐神社の境内に植樹し、記念碑を建てて出発した。いまそのなごりの櫻が数樹、春になると花を咲かせている。

久野勝弥先生記